

第二篇 山中の御生活のこと

九、聖山心境 その二

九日 身延山御書（定遺 1923）

然者しかレハ 末代濁世じよくせの謗法ほうぼう・闡提せんたい・五逆ごぎやくたる僧も俗あまも尼によも女メも此經このきやうにて仏ぶつに成らん事疑うたがひ無し。然者しかレバ 法華經ほふけきやう第七云しちニク、

我が滅度の後に於て 応まこ此この經を受持うけもちすべし 是の人仏道にんぶつだうに於て 決定して疑うたがひ有ること無し 云々。此文このぶんこそよによ

に憑たの敷候もしくへ。此等これらをさまさま思おもひつづけて觀念くわんの牀とこの上に夢ゆめを結むすべば、妻恋鹿つまこいしかの音こゑに目をさまし、我身わがみの内に三諦さんたい即そく一いち、

一心さんかん三觀さんくわんの月曇つきぐらり無く澄すみみけるを無明深重むみやうしんじゆうの雲引覆ひきおおいつつ、昔むかしより今いまに至いたるまで生死しんじの九界くわんがいに輪廻りんねする事、此砌このみぎりにしられつ

つ、自みずから かくぞ思おもつづける。

立ちわたる身のうき雲うきぐもも晴はれぬべし

たえぬ御法みのりの鷺わしの山嵐やまかせ

（弘安五年八月二十一日）